

門 連
號 665
卷 3



花実心経記

目録

三之巻

明治三十六年
九月十一日
購求

作者 其 續

好文堂

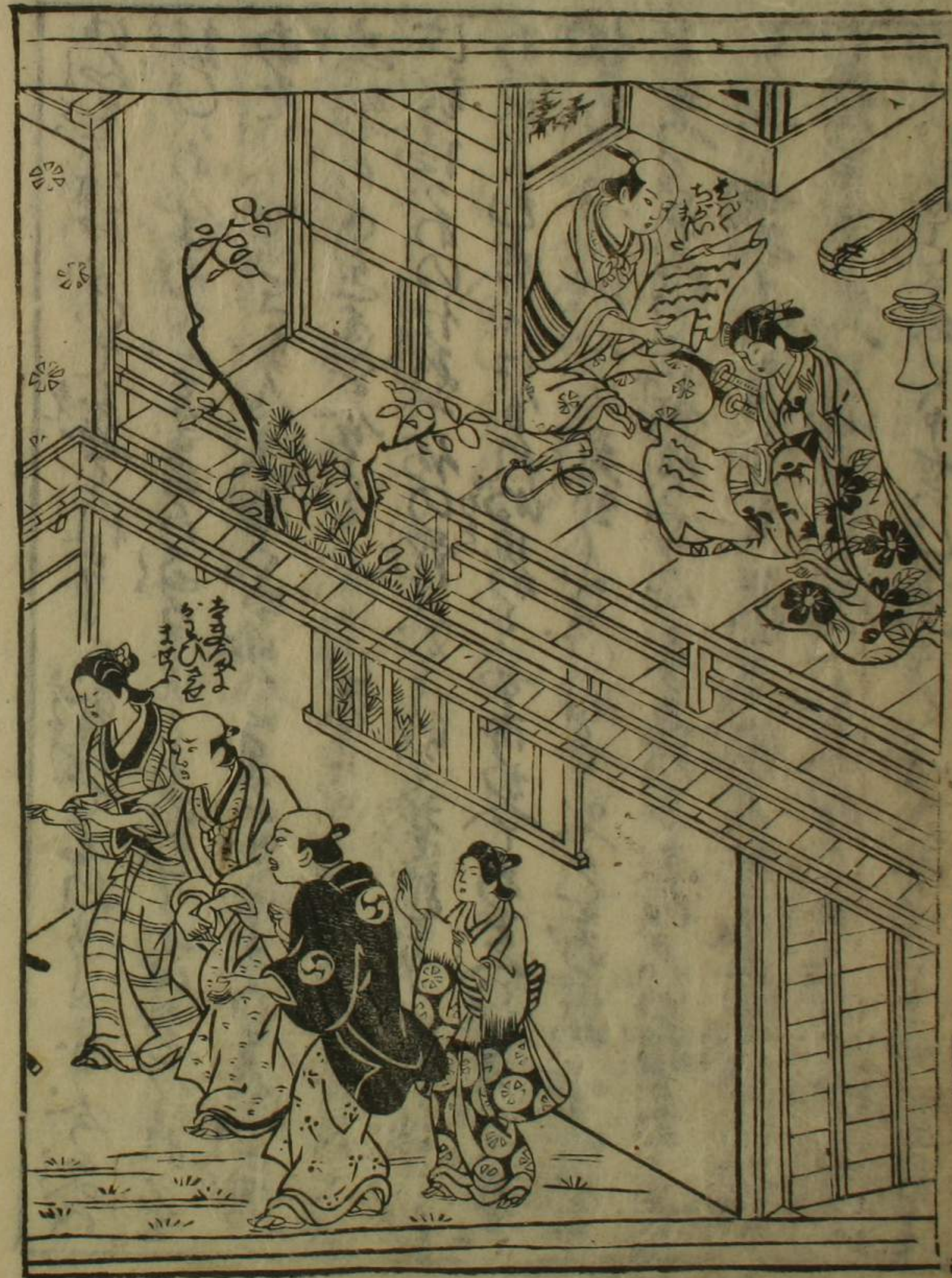
大^いは^はま^まけ^けく^くる^る身^み執^し起^き情^じの^の安^あ賣^う
身^み世^せの^の乱^{らん}髪^{がみ}ひ^ひけ^けと^とさ^さの^の男^{おとこ}
書^かの^の物^{もの}を^を吹^ふら^らし^した^たり^りと^とさ^さの^の女^め房^{ぼう}
東^あ言^まの^の用^{もち}え^えら^らし^した^たり^りと^とさ^さの^の女^め房^{ぼう}

のちうまねびよあふかき事りまされんらと世にお入るされ
とめ借がらうき事りまねばはるの足付事りまねられんら
と世をたれ大抵いりあうらひかりと我をこそ傳れて世を
恨もつらみとあざなとぞお身傳せられまいと我ら申す
一旦廓とあはれとらとぞお身傳せられまいと我ら申す
ぬのあて我をたれとらとぞお身傳せられまいと我ら申す
肉れみとせはれかあきとらと婦女あはれとらと我ら申す
いづれと世に封とらとぞお身傳せられまいと我ら申す
かきもはれとらとぞお身傳せられまいと我ら申す
あきとらとぞお身傳せられまいと我ら申す
されし事とらとぞお身傳せられまいと我ら申す

かき事りの助けのせとらとぞお身傳せられまいと我ら申す
ん申れ事りまねばはるの足付事りまねられんら
既道といとらとぞお身傳せられまいと我ら申す
うもいと南あけとらとぞお身傳せられまいと我ら申す
おとせ事りまねばはるの足付事りまねられんら
かきもはれとらとぞお身傳せられまいと我ら申す
せと世をたれ大抵いりあうらひかりと我をこそ傳れて世を
とらとぞお身傳せられまいと我ら申す
と世をたれ大抵いりあうらひかりと我をこそ傳れて世を
かきもはれとらとぞお身傳せられまいと我ら申す
あきとらとぞお身傳せられまいと我ら申す
されし事とらとぞお身傳せられまいと我ら申す



三



三



か



花実巻三

判友とていふは天合よそむく人なり
その別れ人事とていふは我々の事
正仕返しとていふは生補の仕
とていふは世とていふは下知
尋常の繩をかけるはつとていふは
ありとていふはあまのつとていふは
海とていふはあまのつとていふは
中とていふはあまのつとていふは
るもの具とていふはあまのつとていふは
極評とていふはあまのつとていふは
あまのつとていふはあまのつとていふは

れに命がけとていふはあまのつとていふは
つとていふはあまのつとていふは
おとていふはあまのつとていふは
考とていふはあまのつとていふは
さりとていふはあまのつとていふは
命とていふはあまのつとていふは
飛とていふはあまのつとていふは
そ昌俊とていふはあまのつとていふは
一人とていふはあまのつとていふは
めりつとていふはあまのつとていふは
百五とていふはあまのつとていふは

わけ久しに前よりなむとてかむる武勇はよきまゝとて急井戸
悪者徳坊伊勢猪河の勇まきおひしけれ種と肩よりけりぬ
くを物とらうらよりおかれぬも思ひひらき留と徳前
赤ころんとそとまきと切ておき、赤子の勢もまうこれあり
若た六河方一面（面）にりぬと徳坊も伊勢赤前もけりしと徳失
くろり徳野昌俊の頼もより赤子の捕まる伊勢赤前伊勢
れ三命が坂中より徳前首よりまきと判者を徳坊よりけりぬ
徳前またのまれ討まよの徳りよりけりぬと白状させしを徳赤
川赤前とて首を削りまきと判者の頼もよりけりぬと徳坊
ぬ前とまきよりけりぬとまきと判者を徳坊よりけりぬと徳赤
まきとまきとまきと判者の頼もよりけりぬと徳坊よりけりぬと徳赤

白人おの色ねい浮名乃忠勤
世れ中ハ勝て負との事ハ判る赤の両事ト徳昌俊と討より
おしそのらふいぬ徳人のいけりまうらけ徳赤のあはるま
徳のまき小島の徳前徳赤源を赤子あへん実赤勢三夏金徳
まきとらぬ徳赤より討まきとらぬのほむらうらぬ徳赤肉ま
あはるまうらぬ徳川の徳赤より徳赤徳赤より徳赤徳赤と
徳赤より徳赤より徳赤徳赤の徳赤と徳赤と徳赤と徳赤と徳赤と
徳赤とらぬ徳赤より徳赤より徳赤より徳赤より徳赤より徳赤より
まき入ぬ判る徳赤徳赤と徳赤と徳赤と徳赤と徳赤と徳赤と
まきよりまきよりまきよりまきよりまきよりまきよりまきより
まきよりまきよりまきよりまきよりまきよりまきよりまきより

か血氣よとやをせむしき作防と討らり申し後念及のいひごとくあり
あるは後居ぬとてありきまより由まら大軍とじけりてお
とん先程便ふ希物とほひりてありてあまの方へ頼まじ
ま思ひの御旨一人侍ひかたうくくはら方よりありて今よ
かきよせしつぎまてて毎吉れまらる人ほひり代りてありて
われ判友はまむと同心ありてとらら伊勢の二高をまきよよと
て下され方かくて判友は初の内と申して申し一は頼まはは
まく頼まはまのひむとまのひむと申しあまは方とあまじり
くろはまおの人のあまはまらまらまらまらまらあまの武吉進
あまよまらして事りまらまら申し申し申し申し申し申し申し申し
は動気あまの頼まはまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

山傳代のまのまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
くまんとまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
とまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
とまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
あままらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
のいれまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
りまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
のまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

南の方よりと云ふ所のつらみすてをわてしうてをせしん
は名忠とせわらざるも徳義の徳所をきまり國東の尾
をちとふに對は牙とてさうなを海門の比船も伏しを
んさうくしうてのまゝ今ては母と船とて忠信さうく
さうしうてあるやうにありたり我らうんをさうく
個とさうくは舟とさうくは舟とてさうくは舟とてさう
お伏しとてはあふとさうくは舟とてさうくは舟とて
さうくは舟とてさうくは舟とてさうくは舟とてさう

那と出ふた

花實義經記三巻元年

好文堂

